

# 地域における劇場受容に関する考察

## —サイレント・パトロン形成という観点から—

五島朋子\*

### A Study on the Acceptance of Theatre in Local Community From the Viewpoint of Silent-Patron Development

GOTO Tomoko\*

キーワード：地域劇場，サイレント・パトロン，鳥の劇場，非利用価値

Key Words: Regional Theatre, Silent-Patron, The Bird Theatre, Nonuse Value

#### I. はじめに

本稿は、住民による文化施設の活動評価、およびその評価の変化を通して、芸術活動や文化に関心のない住民が、地域の文化施設のどのような「非利用価値」を評価し、劇場を地域に必要なものとして受容していくのかを探ることを目的としている。

一般的に、劇場・ホールなど上演設備のある文化施設は、会場を借りて舞台作品を上演したり、観客として公演を鑑賞したりする「利用者」のためのものといえる。しかし、市民会館や公立ホールといった、自治体が税金を投じて設置した公立文化施設には、直接その施設を利用しない市民にとっても何らかの便益を持つことが求められる。学校や病院であれば、現在自分は利用していないが、健全で安心できる地域社会を維持して行くために必要な機関として、税金が投じられることに異論は少ないだろう。これらの施設の公共性は、現代日本ではある程度自明のものとして多くの人に共有されていると思われる。一方、美術館や劇場などの文化施設は、これまで一部の愛好家や文化活動者のためのものと捉えられがちであったが、それでも施設の運営は可能であった。しかし、2003年の地方自治法改正による公立文化施設への指定管理者制度の導入、自治体の厳しい財政縮減、市町村合併の進展、地域における文化活動者（愛好家）の高齢化などから、文化施設の継続的な運営や事業費獲得には、直接利用しない市民の理解や支持は必要不可欠なものとなりつつある。このような文化施設に足を運ぶことはなくても、劇場や文化施設は地域に必要なだと考える市民を、本稿では「サイレント・パトロン」（吉本 2008, 55 ページ）と呼ぶことにする。

「劇場」は、鑑賞や興行による会場使用といった「利用」による便益にとどまらない「非利用価値」があると考えられている。代表的な非利用価値として、以下があげられる。（垣内 2012, 148 ページ, 中川 2001, 112-113 ページ）

存在価値（文化施設が存在するという知識から発生する価値）

オプション価値（将来的に利用する可能性があるという動機から発生する価値）

代位価値（同世代の他者が文化施設を利用していることから発生する価値）

遺贈価値（将来世代が文化施設を利用することから発生する価値）

---

\*鳥取大学大地域学部附属芸術文化センター

威信価値（文化施設が存在することが市民にとっての誇りになるという威信から発生する価値）  
 教育的価値（社会の創造性や文化的評価能力を高め、その結果社会が受ける便益）

文化施設のこのような非利用価値に注目した研究として、仮想評価法（Contingent Valuation Method=CVM）<sup>1</sup>による社会的便益の規模の推計や、経済波及効果の算出により、当該施設の事業費や維持管理費への公的資金の妥当性を示すものがあげられる（垣内2012，奥山他2007，垣内他2005）。仮想評価法では、文化施設の受益者として非利用者含め、質問紙調査から支払意思額を算出し、その意思決定の前段としてどのような非利用価値に重きが置かれているのかが検討される。たとえば、新潟市民芸術文化会館（愛称「りゅーとびあ」）の事例では、支払い動機となる価値構造として「利用価値」（利用したことがある、将来的に利用するから）よりも、「威信価値」（「りゅーとびあ」のような施設があることを誇りに思う）や「遺贈価値」（将来世代に文化的教養を身につけさせるのに必要）の割合が高くなっている。<sup>2</sup> このように市民全体にとって文化施設は、必ずしも利用価値のみで評価されるものではないことが分かる。また、兵庫県立芸術文化センターに関する非利用価値の推計作業（垣内2012，151-154頁）<sup>3</sup>でも、寄付の受諾理由（複数回答）として「将来世代に文化的教養を身につけさせるため（遺贈価値）」が47.5%、「兵庫県の魅力を高める」が43.2%、「自分は利用しなくても他の人が利用しているから（代位価値）」が39.2%と回答割合が高く、これをもとに算出された非利用価値は、利用価値よりもはるかに大きい額となっている。<sup>4</sup>

本稿では、このような「非利用価値」概念を援用し、地域住民への質問紙調査から、住民が認識する「非利用価値」の存在やその特色を明らかにしながら、地域における劇場を受容し支える「サイレント・パトロン」形成の可能性を探っていく。

## II. 研究の対象と方法

### 1. 鳥の劇場におけるサイレント・パトロンの重要性

本稿では、鳥取市鹿野町にある鳥の劇場を事例としてとりあげ、地域住民を対象とした2回の質問紙調査から、住民の劇場に対する評価とその変化を跡づけ、本事例にみられる文化施設の非利用価値のありようを探る。鳥の劇場は、「特定非営利活動（NPO）法人鳥の劇場」が運営する廃校を活用した劇場であり、演劇作品の創造と発表を行う「劇団」でもある。自治体が設けた「公立」文化施設ではないが、公共的な役割を担っており、以下のような特徴がある。

- ①劇場に使用されている廃校小学校体育館と旧幼稚園舎は、自治体（鳥取市）の公有財産である。<sup>5</sup>
- ②劇場として活動・運営する団体NPO法人鳥の劇場が、活動当初から「劇場の公共性が広く理解され、認知される」ことを使命として掲げ、社会に必要とされる劇場を目標としている。つまり公共性の獲得を活動のミッションとしている。<sup>6</sup>
- ③廃校は、城下町であった地域の歴史を象徴する場所にあること、また小学校という多くの住民にとって身近な場所であることから、その占有使用継続には地域住民の支持が必要である。

廃校を所有する自治体が政策決定を行って「劇場」を設置したわけではないので、「公立」文化施設とは言えないが、以上のように鳥の劇場が掲げるミッション、建物と所在地の歴史の意味や所有者が自治体であることなどから、本事例においてサイレント・パトロンの拡大は、運営基盤の強化や活動継続には必要不可欠な要素である。

また、当該地域では、舞台設備の整った文化施設が設置されたことはなく<sup>7</sup>、鳥の劇場は、白紙のところへ「劇場」が登場したものであり、地域の変化や住民の受容経過を定点的に見て行くことができる好例である。

## 2. 鳥取市鹿野町概要

鳥の劇場が立地する鳥取市鹿野町は、旧気高郡鹿野町が2004年に鳥取市に合併編入されたものである。2011年の質問紙調査時点で、人口は4,194人、65歳以上の高齢者がその30%を占める。合併以前の旧鹿野町は、明治22年に誕生した鹿野村（明治32年に鹿野町）、勝谷村、小鷲河村の3自治体が、昭和30年に合併して発足したもので、50年後の平成の合併時まで町域に変更はない。3町村に小学校がそれぞれ1校ずつあったが、平成12年に統廃合され、現在の鹿野小学校1校となった。現在も、明治以来の3町村区域（小学校区でもある）をもとに、「鹿野地区」「勝谷地区」「小鷲河地区」で、実施・把握されている自治体施策・事業も多い。鹿野町は、ひとまとまりに見れば過疎化と高齢化が進む典型的な中山間地域だが、旧3小学校区にはそれぞれ特徴がある。鹿野地区は戦国武将亀井茲矩が治めた城下町としての歴史や遺構があり、鹿野町人口の50%が居住し、旧町時代は行政・商業の中心的役割を担ってきた。小鷲河地区は面積の95%を山林原野が占める農村集落であり、勝谷地区は戦後の温泉地・宅地開発により温泉立寄客や新住民の受け入れ等町外との交流が多い地域である。このように3地区は、歴史や成り立ちが異なり、地区住民の年齢構成や町外出身者の割合等に顕著にそれが現れている。また、鹿野地区では、平成10年頃からと、現鳥取市内でもいち早く住民主体のまちづくり活動が行われるようになった。鳥の劇場が使用しているのは、統廃合により使われなくなった旧鹿野小学校体育館及び併設されていた旧鹿野幼稚園舎であり、平成の合併以前に「鹿野地区」住民が通った小学校である。<sup>8</sup>

芸術文化に関する環境についてみておくと、鹿野町内には、舞台設備と観客席を持つ文化会館や公立ホールはなく、町内で本格的な舞台を鑑賞する機会はごく限られたものだった。生の舞台を鑑賞するには、車で約30分の鳥取市中心市街地にある県民文化会館や鳥取市民会館といった公立文化施設へ足を運ばねばならない。<sup>9</sup> このような文化環境において、四半世紀を超えて創作・上演が続けられている「鹿野ふるさとミュージカル」の活動は特筆に値する。旧鹿野町役場が主導し、1982年の「鹿野町民音楽祭」と名付けられた音楽コンサートがその始まりである。1987年から、鹿野町を題材とした創作ミュージカルとして拡充され、町民自らが舞台に立つ。脚本、演出、作曲には県外の専門家の力を借りて、これまでに5つのオリジナル・ミュージカル作品を作り上げ、市町村合併後も、毎年いずれかの作品が上演されている。キャスト、オーケストラ、コーラスには、鹿野町民を中心に鳥取市内からの参加・協力を得て、出演者は総勢200名を超える。町内の中央公民館体育館に仮設舞台を設けて上演会場とし、多くの町民が集まり、鹿野町に欠かせない文化イベントとして定着している。鳥の劇場のような拠点を持つ活動ではないものの、長期にわたって継続されてきた町民主体の舞台芸術であり、また自治体予算<sup>10</sup>が事業費に割り当てられている公的文化事業でもあり、質問紙調査では鳥の劇場との比較対象として取り上げた。正式名称は「鹿野ふるさとミュージカル」だが、これ以降「ミュージカル」と略して表記する。<sup>11</sup>

## 3. 鳥の劇場の活動展開—設立から2011年まで

鳥の劇場の沿革と活動状況を簡単に振り返る。鳥の劇場は、東京で活躍していた演劇人中島諒人氏が鳥取市に帰郷して、2006年初頭に立ち上げた劇団であり劇場である。鳥取県庁や鳥取市鹿野総合支所職員の協力を得ながら、鳥取市内で活動拠点を探し、2006年から旧鹿野小学校体育館と隣接する旧幼稚園舎の建物を活動場所として使用するようになった。<sup>12</sup> 稽古や上演が自由にできる拠点を得たことが契機となって、劇団の作品を上演するだけではなく、地域における「劇場」の役割

を探りながら様々な事業を展開している。

表1に、2006年から11年までの事業数や参加者数などを、NPO法人鳥の劇場が発行する年次活動報告書をもとにまとめた。毎年の事業は、「つくる」(劇団としての作品上演)、「招く」(外部からの招聘公演)、「いっしょにやる」(講座やワークショップ)、「試みる」(外部のアーティストが鳥の劇場に滞在して作品を制作する)、「考える」(様々な社会的課題などをテーマに行う講座)という柱立てのもとに企画実施されている。また、2008年から鳥取県・鳥取市と「鳥の演劇祭」を協同で開催し、県と市の予算も割り当てられ、文化庁補助金も得て実施されている。演劇祭は毎年9月後半の3週末に開催され、鳥の劇場の作品のほか、国内外から招聘された作品が上演される。また、鳥の劇場は、通常の公立文化施設のような貸し館事業は行っていない。

年々事業数は増え事業費規模も大きくなっているが、公開されている報告では、収入の3から5割が助成金であり、チケット収入は1割に満たない。残りの収入は、演劇祭など自治体との共同事業の受託費や寄付などである。

現在、鹿野町内には、小学校(2013年の児童数179人)、中学校(2013年の生徒数96人)がそれぞれ1校ずつある。鹿野中学校は隣接する城跡公園内に立地しており、全校生徒の劇場招待が活動当初の2006年に行われ、2008年、2011年と実施されている。また鹿野小学校には、同じく2006年度から学習発表会での舞台発表へ向けたサポートなどを継続しており、鹿野町在住の子どもは、何らかの機会に鳥の劇場の作品を見たり劇場メンバーと接している。学校・福祉施設などでの学習発表会のサポートや演劇ワークショップは、年々実施学校数も回数も増えており、2011年には、ワークショップの回数は全部で115回と報告されている。また、2010年度からは、中学生以下の子どもを対象に演劇のみならず様々なアートや社会の仕組みを学ぶ講座「小鳥の学校」が毎年開講されているほか、2011年の5月からは、親子での観劇を意識した作品の上演が定期的に行われている。<sup>13</sup> 以上のように、活動を継続する中で、子どもを対象とする事業、学校教育現場での活動が大きなウェイトを占めるようになっていく。

事業	06年度事業/参加者	07年度事業/参加者	08年度事業/参加者	09年度事業/参加者	10年度事業/参加者	11年度事業/参加者
創る	4公演10上演 1,017	11作品33上演 1,682	3作品18上演 1,669	4作品29上演 1,780	3作品20上演 1,342	5作品34上演 2,476
招く		1事業 216	1事業 144	4事業8回 745	3事業6回 382	1事業 90
試みる		2事業3回 473	2事業 112	2事業17回 770	4事業41回 1,056	1事業 93
いっしょにやる		15事業 678	7事業12回 119	6事業17回 187	3事業5回 182	1事業6回 14
考える					1事業6回 161	1事業2回 120
参加延べ人数	1,017	3,049	2,044	3,482	3,123	2,793
鳥の演劇祭	—	—	6作品16上演 1,742	10作品23上演 2,653	19作品39上演 3,132	15作品37上演 3,165
劇場主事業の参加延べ人数	1,017	3,049	3,786	6,135	6,255	5,958
その他事業			その他WS 700	芸術学校 142 その他WS他 1,500 学校等WS 1,641	BeSeTo演劇祭 904 その他WS他 915 学校等WS 2,005	その他WS等 742 学校WS 3,710
	県外上演3カ所	県外上演2カ所	県外上演4カ所	見学・視察 450 県外上演2カ所 435	見学・視察 323 県外上演4カ所 4,175	見学・視察 454 県外上演2カ所 278
推計参加者数	集計なし	集計なし	集計なし	4,168	8,322	5,184
訪問学校数		10	10	15	22	36
総合計人数	1,017	3,049	3,786	10,303	14,577	11,142
サポーター人数(口)	—	121	230人(556口)	318人(890口)	360人(842口)	353人(917口)
事業費(助成金・チケット収入割合)		2500万円	3880万円(30%・—)	6100万円(44%・9%)	6900万円(52%・7%)	7700万円(30%・5%)

表1 鳥の劇場の活動概要 2006～2011年度(鳥の劇場発行の事業報告書をもとに筆者作成)

鳥の劇場は、ホールや会場を使用料で貸し出す「貸し館事業」がないので、企画内容に責任を持つ自主企画の事業のみを行うこと、また、演出家、俳優、音響照明等のスタッフなど、アーティストが常駐するレジデント・シアターであり、<sup>14</sup> 継続的にワークショップや作品創造が行えるという点が日本の公立文化施設と大きく異なる特色である。

#### 4. 質問紙調査概要

以上のような鹿野町の特色、鳥の劇場の活動経緯などを踏まえ、質問紙調査は高校生以上の全町民を対象として実施した。鳥の劇場で行われる事業の参加者（＝利用者）は、居住地を見る<sup>15</sup>と約7割が、鹿野町外の鳥取市内住民である。しかし、鳥の劇場が占有使用している小学校体育館・幼稚園舎は、旧鹿野町が設置した公共施設であり、鳥の劇場の負担者の範囲を、まずは鹿野町民として想定した。

1回目の質問紙調査を、鳥の劇場が活動を始めて2年後の2008年秋に、2回目のある程度名前や活動が浸透して来たと考えられる5年目の2011年秋に実施した。<sup>16</sup>この2回の調査で得られた集計データから、鹿野町住民の鳥の劇場評価の変化や、評価にどのような個人の属性や地域特性が関係しているのかをみていく。

鹿野町の15歳以上人口を、鳥取市の住民登録から算出すると、2008年3,824人、2011年は3,760人である（表2）。質問紙は、2008年、2011年ともに、10月に鳥取市鹿野町総合支所地域振興課の協力により、各自治会長を通じて各戸に配布した。<sup>17</sup>各世帯構成員の年齢が分かるデータは、個人情報保護の観点から公開されていなかったため、一戸あたり5枚の調査票を配布した。2008年は、鳥の劇場スタッフが各自治会長宅を回って回収、2011年は総合支所に設置した回収箱に回収した。回収率は表3の通りである。<sup>18</sup>

	2008年	2011年
合計	3,824	3,760
男性	1,811	1,809
女性	2,013	1,951
10代	263	240
20代	416	402
30代	398	397
40代	466	417
50代	718	658
60代	565	644
70代以上	998	1,002
鹿野地区	1,687	1,653
小鷲河地区	694	557
勝谷地区	1,443	1,550
全世帯数	1,392	1,436
自治会所属数	不明	1,772
全人口（*）	4,334	4,194

\*15歳未満含む

表2 調査時15歳以上人口（推計）

	対象人口	回答数	回収率
2011年配布数（推計）	3,760	1,551	41%
2008年配布数（推計）	3,824	1,820	48%

表3 回収率

### Ⅲ. 質問紙調査結果

#### 1. 回答者属性

2008年と2011年の回答者の性別、年齢、居住地区を表4に、2011年回答者の生まれた場所と職業を表5に示した。回答者属性は、女性が男性よりやや多く、10代、20代の割合が少なく、60代以上の高齢者で4割を占める。性別、年代ともに実態との差は小さく、鹿野町住民の傾向を反映するものとしてこれ以降の分析を進める。まず、2011年の調査結果から、「ミュージカル」と鳥の劇場の鑑賞者像や活動評価を比較し、続いて2008年と2011年のデータ比較から、鳥の劇場受容の変化をみていく。

	2011年 n=1,551		2008年 n=1,820		
	度数	%	度数	%	
性別	男性	733	47.3	849	46.6
	女性	785	50.6	935	51.4
	無回答	33	2.1	36	2
年齢	10代	78	5	80	4.4
	20代	121	7.8	164	9
	30代	155	10	195	10.7
	40代	175	11.3	225	12.4
	50代	293	18.9	385	21.2
	60代	320	20.6	310	17
	70代以上	395	25.5	440	24.2
	無回答	14	0.9	21	1.2
居住地区	鹿野地区	694	44.7	975	53.6
	小鷲河地区	315	20.3	291	16.0
	勝谷地区	533	34.4	554	30.4
	無回答	9	0.6	—	—
	合計	1,551	100	1,820	100

表4 属性毎の回収状況

	2011年 n=1,551		
	度数	%	
生まれた場所	今住んでいる場所	728	46.9
	町内の別の場所	233	15
	鳥取県内	451	29.1
	鳥取県外	125	8.1
	無回答	14	0.9
職業	会社員	369	23.8
	公務員・団体職員	144	9.3
	会社・団体役員	31	2
	自営業	99	6.4
	農林業	174	11.2
	パート・アルバイト	129	8.3
	専業主婦	132	8.5
	高校生	60	3.9
	大学生・短大生	12	0.8
	専門学校生	5	0.3
	無職	366	23.6
	その他	9	0.6
	無回答	21	1.4
合計	1,551	100	

表5 回答者属性

#### 2. 2011年の質問紙調査結果より

##### (1) 鳥の劇場参加者の姿

鳥の劇場(=鳥)と「ミュージカル(=M)」との間で観劇などの参加体験者の属性には、なにか違いが見られるのだろうか。ここでは、2011年の集計結果から、回答者を以下の4グループに分け、クロス集計で検討した(表6)<sup>19</sup>。ここでの「参加」は、公演鑑賞だけではなく、上演への参加や、ワークショップや講座等の事業への参加、運営手伝いなどの参加体験も含めている。

- ・鳥+M (n=345人) : 両方の事業への参加体験がある
- ・鳥のみ (n=58人) : 鳥の劇場での参加体験はあるが、ミュージカルはない
- ・Mのみ (n=378人) : 鳥の劇場での参加体験はないが、ミュージカルはある
- ・なし (n=630人) : どちらの参加体験もない



	鳥+M		鳥のみ		Mのみ		なし		合計	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
男性	131	19.4	29	4.3	147	21.7	370	54.7	677	100
女性	212	29.7	28	3.9	227	31.8	247	34.6	714	100
合計	343	24.7	57	4.1	374	26.9	617	44.4	1,391	100
10代	44	58.7	11	14.7	9	12.0	11	14.7	75	100
20代	17	14.9	1	0.9	43	37.7	53	46.5	114	100
30代	20	13.8	10	6.9	33	22.8	82	56.6	145	100
40代	44	25.9	10	5.9	43	25.3	73	42.9	170	100
50代	70	25.0	4	1.4	84	30.0	122	43.6	280	100
60代	85	28.8	14	4.7	79	26.8	117	39.7	295	100
70代	48	24.4	6	3.0	53	26.9	90	45.7	197	100
80代	17	13.2	2	1.6	32	24.8	78	60.5	129	100
合計	345	24.6	58	4.1	376	26.8	626	44.6	1,405	100
鹿野	180	28.2	22	3.4	183	28.6	254	39.7	639	100
小鷺河	45	16.2	6	2.2	81	29.1	146	52.5	278	100
勝谷	119	24.2	30	6.1	114	23.2	228	46.4	491	100
合計	344	24.4	58	4.1	378	26.8	628	44.6	1,408	100

表6 回答者属性と参加体験の有無

の年代よりやや高く、またどちらも「なし」と答えた人の割合も高い。50代は「鳥のみ」の割合が低く、「Mのみ」の割合が高い。60代では「鳥のみ」「鳥+M」の割合が高い。年齢によって、どちらへの参加体験があるかはばらつきがある。鳥の劇場鑑賞者は、学校全体で観劇した10代、文化消費傾向の高い50代60代に多く、一方20代の若い世代の関心が低い。

居住地区で見ると、「ミュージカル」の開催場所があり、鳥の劇場の拠点でもある鹿野地区の住民は、いずれかに参加している割合が高く、どちらも「なし」と答えた人の割合は少ない。「鳥のみ」と答えた人の割合が勝谷地区では他2地区より明らかに多く、反面「Mのみ」と答えた人の割合が他2地区より少なくなっている。勝谷地区は、昭和47年から温泉が利用できる宅地分譲が始まり、他の2地区に比べると町外からの転入者も多く、都会的な趣味やハイカルチャー志向をもつ住民の存在が想定される。小鷺河地区では、鳥の劇場参加体験者の割合は少なく、どちらも「なし」と答えた人の割合が高くなっている。旧鹿野小学校は、小鷺河地区の多くの住民にとっては通った学校ではなく、2011年秋の時点では鳥の劇場は縁遠い存在であるようだ。

「生まれた場所」（有意水準5%で有意差あり）で見ると、「今住んでいるところで生まれた」という人は、どちらも体験「なし」の割合が50%と顕著に多い。また、「今住んでいるところで生まれた」「鹿野町の別の場所で生まれた」という人は「Mのみ」参加体験の割合が「鳥+M」の割合より高く、「ミュージカル」は町民イベントとして広く定着している様子うかがえる。鹿野町外出身者では、逆に「鳥+M」の割合が「Mのみ」よりも高くなっている。鹿野町外の「県内出身者」の8割は女性で、「今住んでいるところで生まれた」人の70%が男性となっており、町外から結婚を機に町民となった女性の文化選好が現れているものと思われる。

休日や余暇の過ごし方を尋ねた。<sup>21</sup>「鳥+M」への参加体験がある人は、他の3グループと比べ「自治会等の地域活動」を選んだ人が有意に多い。また、「趣味の稽古ごとや創作活動」「まちづくりのための地域活動」「観劇や展覧会、映画館での映画鑑賞」といった、文化活動に関する余暇

「鳥+M」「Mのみ」で、女性は、実際の人口構成よりも参加割合が高い。年齢では、10代は「鳥+M」「鳥のみ」で割合が高くなっているのは、中学校全校生徒招待で観劇しているからと思われる。<sup>20</sup>一方、20代は鳥の劇場参加体験者が顕著に少ないが、「Mのみ」と答えた人の割合は高い。30代は「鳥のみ」の割合が他

	鳥+M		鳥のみ		Mのみ		なし		合計	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
生まれた場所										
今住んでいる所	128	19.0	22	3.3	183	27.2	340	50.5	673	100
鹿野町内	54	26.2	6	2.9	71	34.5	75	36.4	206	100
鳥取県内	125	30.1	25	6.0	103	24.8	162	39.0	415	100
鳥取県外	38	33.9	5	4.5	20	17.9	49	43.8	112	100
合計	345	24.5	58	4.1	377	26.8	626	44.5	1,406	100
余暇活動										
新聞/雑誌/読書	177	51.8	29	50.0	182	48.8	245	39.6	633	45.5 *
TV/ラジオ/インターネット	201	58.8	22	37.9	215	57.6	366	59.2	804	57.8 *
軽い運動やスポーツ	86	25.1	12	20.7	74	19.8	107	17.3	279	20.1 *
趣味の稽古ごとや創作	72	21.1	7	12.1	53	14.2	55	8.9	187	13.4 *
畑仕事/ガーデニング	145	42.4	20	34.5	175	46.9	253	40.9	593	42.6
観劇/展覧会/映画鑑賞	39	11.4	4	6.9	19	5.1	14	2.3	76	5.5 *
泊まりがけの観光旅行	28	8.2	6	10.3	21	5.6	34	5.5	89	6.4
飲食/ショッピング/行楽	115	33.6	22	37.9	145	38.9	168	27.2	450	32.4 *
子どものための地域活動	20	5.8	6	10.3	18	4.8	16	2.6	60	4.3 *
自治会等の地域活動	90	26.3	6	10.3	65	17.4	77	12.5	238	17.1 *
まちづくり活動	63	18.4	6	10.3	27	7.2	32	5.2	128	9.2 *
ゲーム/パチンコ	6	1.8	1	1.7	9	2.4	35	5.7	51	3.7 *
友人家族との団らん	132	38.6	27	46.6	137	36.7	152	24.6	448	32.2 *
家事や子どもの世話	116	33.9	18	31.0	121	32.4	141	22.8	396	28.5 *

表7 生まれた場所・趣味余暇活動と参加体験の有無

活動では、「鳥+M」参加者のほうが「ミュージカルのみ」参加者より有意に大きな値となっている。一方でどちらも参加体験「なし」と答えた人は、「畑仕事」「泊まりがけの旅行」「テレビ」「ゲーム・パチンコ」を除いたすべての項目で、鳥の劇場か「ミュージカル」の参加体験があるグループより有意に低くなっている。このことから、地域活動、文化活動等の趣味や社会的な活動にかかわっている町民は、分野を限らず、様々な種類の社会的な活動に活発に参加していることが伺える。人口が少なく、年齢構成でも高齢者が多い地域では、地域活動、芸術文化活動ともに、ある程度固定化した積極的な住民によって担われているものと思われる。

以上から、鹿野町住民における鳥の劇場参加者は、学校において授業のいっかんとして全員参加で鑑賞した10代、鳥の劇場から心理的・物理的に距離が近い「鹿野地区」住民、多様な地域活動のひとつとして鳥の劇場の活動に参加している積極的な住民であって、とくに芸術の愛好家とは限らないといえる。

## (2) 「ミュージカル」と鳥の劇場に対する評価の違い

2011年の質問紙には、「ミュージカル」と鳥の劇場についての評価を比較するため、同じ質問（「ふるさとミュージカル/鳥の劇場は、地域や町民に以下のような変化や成果をもたらしていると思えますか？」）を設けた。5件法（5. とてもそう思う 4. そう思う 3. どちらともいえない 2. そう思わない 1. まったくそう思わない）で得た結果を平均値で比較した（表8）。数値の大きいほうを網掛けで示している。表中「\*」は、t検定による平均値の比較により、両側有意確率5%で有意を示す。

平均点の上位4項目は、「町外からの訪問客が増えた」「子どもたちがすぐれた芸術に触れる機会が増えた」「鹿野町の文化的魅力が増した」「子どもたちの教育に貢献している」であり、順番



評価項目	鳥の劇場	ミュージカル	有意
町外からの訪問客が増えた	3.63	3.47	*
子どもたちが優れた芸術に触れる機会が増えた	3.52	3.47	*
鹿野町の文化的な魅力が増した	3.50	3.52	
子どもたちの教育に貢献している	3.40	3.36	*
国際的な水準の芸術活動を鹿野にもたらした	3.39	3.17	*
町民どうしの交流の機会が増えた	3.21	3.32	*
地域の商業活動に波及効果をもたらしている	3.17	3.03	*
地域への愛着が高まった	3.16	3.30	*
舞台上で表現する楽しさが分かった	3.12	3.20	*

表8 ミュージカル／鳥の劇場の活動がもたらす変化や成果

は前後するものの鳥の劇場と「ミュージカル」のどちらも同じ項目となっている。公演時のにぎわい創出、文化的魅力、次世代の教育のためには有効と認識されており、鳥の劇場と「ミュージカル」に対する町民が認める価値の方向性は大きく異なることが分かる。

平均点数をみると「舞台

で表現する楽しさが分かった」「地域への愛着が高まった」「町民同士の交流の機会が増えた」では、「ミュージカル」の平均点ほうが鳥の劇場より有意に高い。自分自身の満足感や変化、また鹿野町内の変化に関する項目では、「ミュージカル」に対する評価の平均点が高くなっている。一方、鳥の劇場の平均点のほうが有意に高い項目は、「町外からの訪問客が増えた」「地域の商業活動に波及効果をもたらしている」「国際的な水準の芸術活動を鹿野にもたらした」といった対外的な影響やイメージである。また、「子どもたちが優れた芸術に触れる機会が増えた」「子どもたちの教育に貢献している」というも、鳥の劇場のほうが「ミュージカル」よりも平均点は有意に高くなっている。

ここから、2011年秋の調査時点では、ミュージカルは町内的、地域密着型の身近な文化イベントとして、また自ら演じ楽しむ表現活動として捉えられているのに対し、鳥の劇場の活動は対外的な影響を与えていること、また次世代への教育効果という面で、より評価されている。

さらに、町民の2つの活動への参加体験の有無によって、これらの評価に違いがあるのかどうかを探った。(表9)一元配置分析による多重比較を行い、有意水準5%で有意差がある項目を以下に取り上げた。鳥の劇場の活動の評価に関する平均点は、「町外からの訪問客が増えた」を除いてすべての項目で、高い方から「鳥+M」「鳥のみ」「Mのみ」「なし」の順となっており、また「鳥M」両方に参加した人の平均点は、「ミュージカルのみ」参加者よりも、すべて有意に平均点が高

	鳥の劇場への評価				ミュージカルへの評価			
	鳥+M	鳥のみ	Mのみ	なし	鳥+M	鳥のみ	Mのみ	なし
町外からの訪問客が増えた	4.01	4.02	3.64	3.33	3.71	3.55	3.57	3.25
子どもたちが優れた芸術に触れる機会が増えた	3.91	3.90	3.52	3.23	3.76	3.53	3.57	3.21
鹿野町の文化的な魅力が増した	3.87	3.80	3.57	3.19	3.84	3.65	3.73	3.17
国際的な水準の芸術活動を鹿野にもたらした	3.80	3.71	3.41	3.09	3.32	3.25	3.25	3.04
子どもたちの教育に貢献している	3.76	3.67	3.37	3.18	3.60	3.40	3.44	3.14
舞台上で表現する楽しさが分かった	3.55	3.39	3.07	2.85	3.55	3.17	3.44	2.85
地域への愛着が高まった	3.47	3.41	3.16	2.94	3.61	3.29	3.47	2.99
町民どうしの交流の機会が増えた	3.44	3.29	3.22	3.03	3.58	3.35	3.44	3.08
地域の商業活動に波及効果をもたらしている	3.40	3.32	3.21	2.98	3.08	3.02	3.10	2.95

表9 ミュージカル／鳥の劇場の活動がもたらす変化や成果（参加体験の有無とのクロス）

い。<sup>22</sup>鳥の劇場に関する評価の変化は、実際に参加・体験することによって高くなっているといえ

る。また、鳥の劇場参加体験がなく、「Mのみ」参加者であってもすべての項目で、どちらの参加体験も「ない」人の平均値より有意に高く、「ミュージカル」参加体験が、鳥の劇場の受容を支えた要因のひとつとなったと考えられる。一方、「鳥のみ」参加者の平均点の方が、「ミュージカルのみ」参加者の平均点よりも有意に高いのは、「町外からの訪問客が増えた」と「子どもたちが優れた芸術に触れる機会が増えた」であり、劇場のにぎわいぶりや、作品内容への評価は実際の参加体験が後押しするものと思われる。

「ミュージカル」に対する評価では、「地域の商業活動に波及効果をもたらした」を除き、平均点は高いほうから概ね「鳥+M」「Mのみ」「鳥のみ」「なし」の順となっており、やはり当該の舞台芸術活動への直接的な参加体験が様々な変化や影響の評価につながっていることがわかる。「ミュージカル」については、「鳥+M」参加者、「鳥のみ」参加者、「Mのみ」参加者の間で、平均点に有意な差がある項目が少ない。「鳥+M」と「鳥のみ」の間で、すなわちミュージカル体験の有無で、有意な差があるのは「舞台上で表現する楽しさが分かった」のみであり、「ミュージカル」についてのイメージは広く町民に共通して浸透しており、評価も参加体験の有無によらず大きな違いはないと考えられる。

以上から鳥の劇場と「ミュージカル」の参加体験の有無による、鳥の劇場活動評価について次のようにまとめられる。

- ①町民自身が演じる「ミュージカル」の上演・運営という長年の体験蓄積が、馴染みの薄い現代劇を上演する鳥の劇場の活動を、好意的に受容する素地のひとつとなった。
- ②「ミュージカル」も鳥の劇場も、活動への町民の評価やイメージは、参加体験の有無にかかわらず、にぎわい、町の魅力、子どもの教育に役立っている、の4項目で共通しており、大きく異なる。鳥の劇場評価とミュージカル評価には、どちらかの参加体験があれば、大きな差が無いことが分かる。
- ③一方、このような舞台芸術活動の経済効果や社会的効果については、鳥の劇場参加者にも「ミュージカル」参加者にもあまり意識されていない。

### 3. 鳥の劇場受容の広がり

鳥の劇場の活動に対する「評価」と、今後の「期待」について、2008年と2011年で同じ質問を設けた。ここでは、その2つの質問の回答から、地域住民の鳥の劇場受容の変化や非利用価値の選好を検討する。

#### (1) 活動参加の有無の変化

1回目の調査を行った2008年から3年が経過し、鳥の劇場への来訪者はどの程度増えたのだろうか。(表10・表11)観劇や主催事業のほかに「何となく立ち寄った」も含めて「行ったことがある」人は、全体で17.3%から28.5%と大きく増えている。そのうち「公演を鑑賞した」人は、「性別」「年代別」「居住地区別」からみても、20代を除いて、有意にその割合は増えている。「その他のイベント」への参加体験も、割合はわずかだが有意に増えており、

		2008年		2011年	
		度数	%	度数	%
ミュージカル参加の有無	知らなかった	102	5.9	56	3.9
	見に行ったことはない	841	48.8	648	44.8
	見に行ったことがある	632	36.6	560	38.7
	参加・手伝い経験あり	141	8.2	177	12.2
	その他	9	0.5	7	0.5
	合計	1,725	100	1,448	100
鳥の劇場参加の有無	行ったことがある	297	17.2%	413	28.5%
	行ったことはない	1,425	82.8%	1,035	71.5%
	合計	1,722	100.0%	1,448	100.0%

表10 参加・体験者数の変化

活動が継続的に行われ、事業内容も幅が広がったことが、参加体験者の増加につながっている。

「行ったことがない」という不参加の理由を見ると(表12)、「何が行われているかよく分からないから」と答えた人の割合は、28.2%から19.9%と減少している。一方「演劇に関心がないから(39.1%から48.5%へ)」「内容が難しそうだから(9.7%から16%へ)」の割合は、有意に増えている。継続的な活動と様々な広報や口コミ等により、活動内容はある程度知られるようになった反面、「時間が無い」「お金がない」という周辺的な理由ではなく、具体的な内容や「演劇」を「行かない」理由に挙げる人の割合が増えている。現代演劇が身近でないことや、聞き慣れない上演作品名が敷居を高くしていると考えられる。

(2) 評価得点と期待得点の変化

これまでの活動への「評価」(表14の質問)と今後の「期待」(表15の質問)に対する回答について、全体の变化を把握するため、回答者が選択した項目数をそれぞれ評価得点・期待得点として算出し、2008年と2011年で比較した。評価得点は1.87から2.21へ、期待得点は1.7から2.2へと、どちらも2008年から2011年には有意に伸びており、3カ年の間に鳥の劇場に対する認知度は上昇し、理解や関心は鹿野町全体としては広がっているといえる(表13)。

回答者の属性でみると、女性の方が男性よりも評価・期待得点ともに高いが、男性も得点そのものは伸びている。年齢では、評価得点は、40代、50代を除いて有意に伸びている。しかし、40代、50代は、2008年、2011年ともに、他の年代より評価得点ははもともと高く、むしろ他の年代

	行ったことがある			鑑賞した			その他イベント		
	2008年	2011年	有意確率	2008年	2011年	有意確率	2008年	2011年	有意確率
男性	15.1%	23.4%	*	9.3%	16.6%	*	1.5%	3.5%	*
女性	19.6%	33.4%	*	14.0%	27.6%	*	3.1%	6.3%	*
10代	30.4%	73.3%	*	17.7%	66.7%	*	3.8%	2.7%	
20代	11.2%	15.5%		5.0%	12.1%	*	1.2%	3.4%	
30代	17.1%	20.4%		8.0%	15.2%		3.2%	4.1%	
40代	17.4%	32.0%	*	13.7%	22.1%	*	2.3%	9.9%	*
50代	18.0%	26.8%	*	12.6%	22.2%	*	3.2%	6.7%	*
60代	22.2%	33.6%	*	15.7%	24.7%	*	2.4%	4.7%	
70代以上	13.3%	22.5%	*	10.1%	16.8%	*	1.0%	2.6%	
鹿野地区	18.5%	31.8%	*	12.8%	23.6%	*	2.6%	6.1%	*
小鷲河地区	12.0%	18.2%		8.1%	15.0%	*	1.6%	2.1%	
勝谷地区	17.5%	30.0%	*	11.2%	24.1%	*	1.9%	5.0%	*
合計	17.3%	28.5%	*	11.6%	22.1%	*	2.3%	4.9%	*

表11 鳥の劇場参加体験の内容

	2008年		2011年		有意確率
	1,382	%	994	%	
何が行われているかよくわからないから	390	28.2	198	19.9	*
場所が遠いから	55	4.0	51	5.1	
演劇に関心がないから	540	39.1	482	48.5	*
内容が難しそうだから	134	9.7	159	16.0	*
なかなか時間が取れないから	487	35.2	314	31.6	
いっしょに行く人がいないから	135	9.8	123	12.4	*
チケット代が必要だから	137	9.9	91	9.2	
「鳥の劇場」に知り合いがないから	47	3.4	41	4.1	
なかなか普段家を空けられないから	140	10.1	82	8.2	

表12 鳥の劇場へ行ったことがない理由

	評価得点			期待得点		
	2008年	2011年	有意確率	2008年	2011年	有意確率
全体	1.87	2.21	*	1.7	2.2	*
男性	1.78	2.06	*	1.67	2.13	*
女性	1.98	2.39	*	1.73	2.3	*
鹿野地区	1.98	2.45	*	1.81	2.46	*
小鷲河地区	1.61	1.81	-	1.41	1.69	-
勝谷地区	1.79	2.13	*	1.6	2.13	*
10代	1.29	2.05	*	1.62	2.04	-
20代	1.32	1.76	*	1.34	2.05	*
30代	1.84	2.2	*	1.72	2.19	*
40代	2.21	2.47	-	2.09	2.41	-
50代	2.14	2.27	-	1.89	2.49	*
60代	2.07	2.45	*	1.68	2.23	*
70代以上	1.63	2	*	1.43	1.91	*
参加体験有	2.92	3.28	*	2.6	3.3	*
非参加者	1.64	1.78	*	1.49	1.74	*

表13 鳥の劇場に対する評価・期待得点

の得点が40代、50代に追いついてきたと考えられる。同様に、期待得点も40代だけ伸びていないが、2008年時点ですでに得点が最も大きかった。20代の評価得点が1.76と低いことを除けば、年代による評価・期待の差は小さくなりつつある。

居住地区では、小鷲河地区住民の得点は、評価も期待も他地区住民より低く、また伸びていない。一方、鳥の劇場が立地する鹿野地区住民の得点は大きく伸び、また勝谷地区でも有意に伸びている。小鷲河地区と他2地区とでは、活動に対する評価・期待について、温度差の開きが大きくなっている。

以上のように鳥の劇場の活動への参加経験がある人と無い人では、得点そのものの差が大きいですが、参加経験が無い人でも、評価・期待のどちらも得点は有意に伸びている。評価・期待には、どこの地区の住民であるかという要因が大きく影響している。また活動に参加していない非参加者であっても、評価・期待得点は伸びており、非利用価値の存在が確認できる。

### (3) 鳥の劇場に対する評価の内容と変化

評価の選択肢には、積極的に劇場の活動を評価する選択肢（「演劇活動を通して地域の活性化に貢献している」）、「地域の魅力」を高めるという非利用価値（「鹿野町の新しい魅力となっている」）、自分は利用しないが次世代育成には有用という非利用価値（「子どもたちに、身近な芸術機会を提供している」）を設け、そのほかに、文化的用途への価値判断を問わない「使われていない公共施設を有効に活用している」という選択肢を設けた。（表14）<sup>23</sup>

鳥の劇場に対する評価についての質問

問：NP0法人鳥の劇場は、廃校になった旧鹿野小学校と旧幼稚園を使って、2006年から演劇を中心に様々な活動を行っています。そのことについて、あなたはどのように感じていますか？（〇はいくつでも）

1. 演劇活動を通して地域の活性化に貢献している
2. 鹿野町の新しい魅力となっている
3. 子どもたちに、身近な芸術体験の機会を提供している
4. 使われていない公共施設を有効に活用している
5. 活動に直接かかわったことはないが、何か応援したいと思う
6. どんな人たちが、なぜ鹿野に来たのか、もっと知りたい
7. あまり関心がない

評価選択肢	「鳥の劇場」参加有			「鳥の劇場」参加無			全体		
	2008年 n=296	2011年 n=400	有意 確率	2008年 n=1339	2011年 n=987	有意 確率	2008年 n=1635	2011年 n=1387	有意 確率
演劇を通し地域活性化に貢献している	62.5%	62.5%		31.9%	34.3%		37.4%	42.5%	*
鹿野町の新しい魅力となっている	67.9%	74.5%		35.1%	41.7%	*	41.0%	51.2%	*
子どもたちに身近な芸術体験を提供している	46.3%	59.3%	*	22.2%	25.9%	*	26.5%	35.5%	*
使われていない公共施設を有効に活用している	70.6%	76.0%		49.1%	50.6%		53.0%	57.9%	*
何か応援したい	26.7%	31.8%		11.3%	12.6%		14.1%	18.1%	*
どんな人たちのかもっと知りたい	16.2%	21.0%		13.9%	12.1%		14.3%	14.6%	
あまり関心がない	6.8%	7.0%		27.3%	39.1%	*	23.6%	29.8%	*

表14 鳥の劇場に対する評価（参加体験の有無によるクロス）

回答をみると、全体では「もっと知りたい」をのぞき、いずれの項目も有意に割合が増えており、とくに「鹿野町の新しい魅力となっている（41%から51.2%）」「子どもに身近な芸術体験の機会

を提供している(26.5%から35.5%)」が、大きく伸びている。この2項目は、男女ともに伸びているが、特に女性の伸びが大きい。

年代でみると、「子どもに身近な芸術体験の機会を提供している」の割合は当事者の「10代」だけでなく、30代、40代、60代で大きく増えており、子もしくは孫育て世代には、小中学校生徒向けの公演や各種事業が訴求力を持ったと思われる。10代、60代、70代以上で「鹿野町の新しい魅力となっている」の割合が顕著に増えており、10代は、やはり実際の観劇体験が評価を押し上げたと思われる。20代の評価得点は、全ての年代の中で最も低く、「使われていない公共施設を有効に活用している」が有意に増えているのみで、活動内容への関心の低いまま、変化がみられない。

居住地区で見ると、鹿野地区では肯定的な評価項目はどれも有意にのびている。特に「鹿野町の新しい魅力となっている」と積極的に評価する人の割合は、他2地区より顕著に高く、58%と6割近くを占める。また、他の2地区住民では「あまり関心がない」と答えた人の割合が有意に増えているが、鹿野地区住民では横ばいで、鹿野地区では鳥の劇場の認知度も広がり、多様な面から評価されるようになってきている。

一方、小鷺河地区住民では、有意に割合が増えた項目は「あまり関心がない」のみで、活動への参加も増えず、評価もあまり高まっていない様子が伺える。また、勝谷地区住民では、「鹿野町の新しい魅力となっている」と「子どもに身近な芸術体験の機会を提供している」が顕著に伸びており、町外からの転入者の割合、40代の子育て世代の割合が、他地区より多いことが理由として考えられる。このように、評価の変化は居住地域によって差が顕著である。

鳥の劇場への参加体験の無い人では、「あまり関心がない」と答えた人の割合は高く、また27.3%から39.1%と顕著に増えている。(表15)しかしながら、「参加体験なし」でも、「鹿野町の新しい魅力となっている(35.1%から41.7%)」「子どもたちに身近な芸術体験を提供している(22.2%から25.9%)」は有意に増えている。

今後「鳥の劇場」に期待すること	参加有			参加無			全体		
	2008年 n=291	2011年 n=394	有意 確率	2008年 n=1303	2011年 n=919	有意 確率	2008年 n=1621	2011年 n=1360	有意 確率
今後とも鹿野町で演劇活動を継続する	23.70%	69.30%	*	35.80%	36.50%		33.7%	46.0%	*
町民の交流の場になる	38.5%	45.9%		26.6%	28.8%		28.7%	34.0%	*
まちづくりと連携した文化イベントを行	45.7%	41.9%		24.2%	26.9%		28.3%	31.4%	
外観や周辺の環境整備	26.8%	31.7%		13.7%	18.9%	*	16.0%	22.6%	*
芸術家が活動できる環境をつくる	22.7%	30.2%	*	9.0%	13.6%	*	11.5%	18.5%	*
ミュージカルと連携した活動をする	29.9%	29.9%		15.3%	16.4%		18.2%	20.2%	
青少年向けの活動をする	23.0%	28.9%		9.1%	11.8%	*	11.7%	16.8%	*
芸術性の高い演劇作品をつくる	26.5%	28.2%		7.6%	11.1%	*	11.0%	16.0%	*
表現や演劇の楽しさを体験できる	23.0%	23.9%		7.7%	10.3%	*	10.7%	14.3%	*
特でない	7.9%	10.4%		33.4%	36.1%		28.7%	28.8%	

表 15 鳥の劇場に対する今後の期待

#### (4) 今後の活動への期待

期待得点も、評価得点と同様に2011年は2008年よりも高くなっている。選択肢には、活動の継続を望むという積極的な期待を示す選択肢(「今後とも鹿野町で演劇活動を継続する」)、演劇を中心とした芸術活動に特有の期待を示す選択肢(「芸術性の高い演劇作品をつくる」「町民が演劇



や表現の楽しさを体験できる活動」「芸術家が活動できる環境をつくる」)、子どもための教育的な活動(「コミュニケーション能力や表現力を高める青少年向けの活動」)、劇場の社会的な機能に関する選択肢(「町民がふらりと立ち寄れる交流の場となる」「まちづくりと連携した文化イベントを企画する」)のほか、鹿野町の特色である町民ミュージカルとの関係についての選択肢(「町民ミュージカルと連携した活動をする」)、具体的な活動内容にかかわらない選択肢(「鳥の劇場の建物や外観や周辺環境整備をすすめる」<sup>24)</sup>、そして期待することは「特でない」の選択肢を設けている。

回答結果をみると、「まちづくりとの連携」「ミュージカルとの連携」を除き、すべての肯定的な項目で、選んだ人の割合は有意に増えている。なかでも、「今後とも鹿野町で演劇活動を継続する」という積極的な期待を示した人は、2008年時点の33.7%から46%と顕著に増えており、劇場の活動への期待は2008年より広がっている。また、割合の高い上位3項目は、2008年から変わらず、「鹿野での活動継続」のほか「町民の交流の場(2011年34%)」「まちづくりとの連携(2011年31%)」である。演劇そのものに関する選択肢「芸術性の高い演劇作品」「演劇や表現の楽しさを体験する」や演劇を活用した活動「コミュニケーション能力や表現力を高める青少年向けの活動」を選択した人も有意に増えてはいるものの、その割合は14~17%と小さい。演劇というジャンルが身近でないうに、さらにその演劇の特性を生かす小中学校等教育現場での活動は、イメージが持ちにくいものと思われる。

性別では、9の選択肢のうち女性は7項目で、男性は6項目で有意に割合が増え、「今後とも鹿野町での活動を継続する」については男女とも有意に伸びており、特に女性では50.1%と半数にのぼる。

年齢で見ると、20代は、鑑賞者数の伸びは少なかったものの、「芸術性の高い演劇作品」「芸術家が活動できる環境づくり」「演劇や表現の楽しさを体験できる」「青少年向けの活動」「ミュージカルとの連携」の割合が2008年から有意に伸び、また他の年代よりも有意に伸びた項目数が5つと多い。2008年の20代の回答は、上記5項目を選択した人の割合が、他の年代より顕著に少なく期待の低さは際立っていたが、変化が見られる。そのほか選択した人の割合が有意に増えた項目は、10代では無いが、30代は「活動の継続」「芸術家が活躍できる環境づくり」、40代は「青少年向けの活動」、50代は「活動の継続」「芸術性の高い演劇作品」「町民の交流の場」「青少年向けの活動」「芸術家が活動できる環境づくり」と、世代によってばらつきがあり、また年齢によって評価得点の順位にも差があるが、これらの違いは年齢よりも、居住地区や鑑賞・参加体験の有無によるところが大きいと思われる。

居住地区で見ると、鹿野地区住民では「ミュージカルとの連携」「まちづくりとの連携」以外のすべての項目で、有意に割合が増えている。「まちづくりとの連携」は2008年から選択した人の割合が31.5%と比較的高かった。また「ミュージカルとの連携」を選んだ人は、全体でも割合が伸びていないが、鳥の劇場の活動が認知されるにつれ、町民というアマチュアが主体の「ミュージカル」とは活動内容の違いが認識されるようになったのではないと思われる。小鷲河地区は、評価得点も低く参加者数も伸びていないが、「芸術性の高い演劇作品」「芸術家が活躍できる環境づくり」「青少年向けの活動」の3項目で選択した人の割合が有意に伸びている。



	鹿野で活動を継続			芸術性の高い演劇作品			町民交流の場			ミュージカルと連携			青少年向けの活動		
	2008年	2011年	有意	2008年	2011年	有意	2008年	2011年	有意	2008年	2011年	有意	2008年	2011年	有意
男性	31.5%	42.6%	*	10.4%	14.5%	*	27.0%	33.2%	*	17.9%	21.6%		11.5%	14.5%	
女性	35.6%	50.1%	*	11.4%	18.0%	*	30.9%	35.7%		18.4%	19.3%		12.2%	19.3%	*
合計	33.6%	46.5%	*	10.9%	16.3%	*	29.0%	34.5%	*	18.2%	20.4%		11.9%	17.0%	*
10代	44.9%	54.7%		14.1%	25.3%		26.9%	30.7%		12.8%	22.7%		7.7%	10.7%	
20代	34.0%	39.0%		9.8%	18.6%	*	23.5%	32.2%		9.8%	21.2%	*	7.2%	16.1%	*
30代	36.9%	47.6%		10.7%	10.9%		28.9%	35.4%		13.9%	15.6%		16.6%	23.8%	
40代	37.7%	47.6%		17.5%	21.3%		32.1%	32.9%		18.9%	20.7%		18.4%	23.8%	
50代	33.3%	49.6%	*	11.6%	17.8%	*	33.9%	42.0%	*	22.0%	20.5%		11.3%	21.2%	*
60代	30.8%	45.8%	*	8.2%	14.8%	*	26.9%	31.3%		24.0%	22.9%		10.8%	13.7%	
70代以上	28.8%	42.3%	*	8.6%	12.0%		25.2%	31.3%		16.6%	18.7%		9.2%	10.3%	
合計	33.6%	46.1%	*	11.0%	16.1%	*	28.7%	34.1%	*	18.3%	20.3%		11.7%	16.8%	*
鹿野	33.5%	51.2%	*	12.6%	18.6%	*	29.9%	37.0%	*	18.7%	21.4%		12.0%	16.6%	*
小鷲河	33.3%	36.6%		6.0%	11.0%		24.4%	28.0%		17.5%	16.9%		8.5%	15.4%	*
勝谷	34.2%	44.0%	*	10.4%	15.5%	*	28.6%	33.5%		17.1%	20.3%		12.8%	17.8%	*
合計	33.7%	45.9%	*	11.0%	16.1%	*	28.7%	34.1%	*	18.1%	20.2%		11.7%	16.8%	*
	演劇や表現の楽しさ			芸術家の活動環境			まちづくりと連携			外観環境整備			特にない		
	2008年	2011年	有意	2008年	2011年	有意	2008年	2011年	有意	2008年	2011年	有意	2008年	2011年	有意
男性	10.4%	14.2%	*	11.6%	17.9%	*	30.6%	29.9%		16.5%	24.5%	*	31.3%	31.0%	
女性	11.2%	14.6%	*	11.5%	19.3%	*	26.1%	33.0%	*	15.5%	21.0%	*	26.2%	25.8%	
合計	10.8%	14.4%	*	11.5%	18.6%	*	28.3%	31.5%		16.0%	22.7%	*	28.7%	28.3%	
10代	12.8%	20.0%		9.0%	16.0%		20.5%	13.3%		12.8%	10.7%		33.3%	32.0%	
20代	5.9%	14.4%	*	6.5%	17.8%	*	22.2%	28.0%		15.0%	17.8%		40.5%	38.1%	
30代	11.8%	15.0%		11.8%	23.1%	*	26.2%	32.7%		15.0%	15.0%		22.5%	25.2%	
40代	13.2%	19.5%		19.8%	21.3%		27.8%	29.9%		23.6%	24.4%		19.8%	28.0%	
50代	12.9%	15.5%		12.4%	23.1%	*	33.9%	36.0%		17.4%	23.1%		24.5%	22.0%	
60代	11.1%	11.3%		10.8%	18.0%	*	28.7%	35.2%		16.8%	29.9%	*	29.0%	28.9%	
70代以上	7.7%	11.3%		8.6%	12.0%		27.3%	30.3%		11.0%	22.7%	*	35.9%	31.0%	
合計	10.8%	14.3%	*	11.5%	18.5%	*	28.2%	31.5%		16.0%	22.6%	*	28.8%	28.5%	
鹿野	11.9%	16.5%	*	13.4%	21.1%	*	31.5%	35.7%		17.9%	27.5%	*	26.9%	25.0%	
小鷲河	10.7%	11.0%		6.4%	14.2%	*	20.5%	21.7%		13.7%	14.6%		33.8%	40.2%	
勝谷	8.1%	13.2%	*	10.4%	17.4%	*	25.5%	31.2%		13.3%	20.3%	*	30.0%	27.5%	
合計	10.7%	14.3%	*	11.6%	18.5%	*	28.2%	31.5%		16.0%	22.6%	*	28.7%	28.7%	

表 16 鳥の劇場に対する今後の期待（属性別）

鳥の劇場への参加体験が有る人では、「鹿野町での活動を継続する」と回答した人が69%に上り、2008年から非常に大きく伸びている。参加経験の無い人でも、「鹿野町での活動を継続する」と答えた人の割合が36.5%と最も多いが、これは2008年から横ばいである。また、期待は「特にない」と答えた人も36.1%と拮抗している。やはり鑑賞や事業への直接の参加体験や参加のモチベーションが、文化施設の受容を促し、肯定的な期待を広く醸成することにつながる事がみてとれる。

一方、参加体験の有無にかかわらず、選んだ人が多いのは「鹿野町での活動を継続する」「町民の交流の場」「まちづくりとの連携」の順である。評価項目でも、参加体験の有無にかかわらず「地域の新しい魅力」を選んだ人の割合が「公共施設の有効利用」に次いで多かった。演劇などの芸術文化に関心のない住民にとって、劇場のような文化施設の意義は、まちづくりや地域活性化といった広く地域住民に還元されるという面が、非利用価値として認識しやすいものと思われる。ただ、参加体験の有無にかかわらず、選んだ人の割合そのものは2008年から2011年は横ばいで増えてはいない。

参加体験が有る人では、「鹿野町での活動を継続する」のほか、「芸術家が活動できる環境づくり」が2008年より有意に割合が増えており、鳥の劇場を芸術家集団として積極的に認めている。ま

た、参加経験の無い人では、公演鑑賞やその他の劇場事業に参加したことがないにもかかわらず、「芸術家が活躍できる環境づくり(13.6%)」「芸術性の高い演劇作品(11.1%)」「表現や演劇の楽しさを経験(10.3%)」を選択した人が、割合は大きくないものの有意に増えている。関心が低い小鷲河地区住民の回答でも、「芸術家が活躍できる環境づくり」「芸術性の高い作品」は、選択した人の割合が有意に増えている。演劇への関心も低く、観劇体験が無いにもかかわらず、芸術活動を推進する項目を選択しているのが不思議に思われるが、芸術家が優れた作品を生み出すことやそのための環境整備は、芸術活動のそのものに必要な当然のこととして選択されているのではないだろうか。また、「青少年向けの活動」は、子どもの教育や次世代育成といった観点から、芸術への関心や愛好と関係なく、地域社会に必要という共通認識が広く持たれているものと思われる。

### (5) 地域住民の劇場評価の変化

2カ年の質問紙調査の比較から、鳥の劇場の活動への参加体験の有無による評価・期待の内容とその変化をみてきた。以上の検討をまとめる。

- ①鳥の劇場での観劇や事業への参加体験のある町民は増え、評価・期待得点も2008年より2011年の方が高く、参加体験の増加が評価を高めている。小中学校向けの事業の実施により、10代と親世代の評価は伸び、世代間の評価の差は小さくなっている一方で、地域間の評価の差が大きくなっている。また、文化的な活動に関心があったり、地域活動にもともと熱心な住民は概ね参加してしまい、今後の集客、参加の拡大の頭打ちが懸念される。
- ②鳥の劇場の事業・活動への参加体験が無い人でも、活動に対する理解や評価は、2008年より高くなっており、鳥の劇場の「非利用価値」が認識されていることが分かる。
- ③参加体験が無い人でも、現在の活動評価については、「地域の魅力」と「子どもの芸術体験の機会」を挙げる人が多い。居住する町の魅力や誇りといった「威信価値」、将来世代の子どものためには必要という「教育的価値」「遺贈価値」は、非参加者にとっても訴求力のある非利用価値として認識されている。
- ④今後どうあって欲しいかという期待については、参加体験のある人はひとまず継続して欲しいという意向が強いが、具体的な方向性に大きな変化は見られない。参加体験のない人や、関心のない人には、殆ど変化がない。観劇等の参加体験のない人にとっても、鳥の劇場は、優れた演劇作品を芸術家の活動で生み出す場所としての評価・期待が限られてはいるものの一定程度あることが分かった。しかし、「劇場」が果たすことができる社会的役割(まちづくり、教育、福祉など)や経済的波及効果への期待は、参加体験の有無にかかわらず、まだ醸成されているとはいえない。

## IV. まとめ

地域住民の意向や行政の政策とかかわり無く、小さな町に突如、現代劇を上演する「劇場」が登場した。地域住民全員を対象とした2回の質問紙調査の結果から、地域住民のこの劇場に対する評価や関心の変化、また、文化に関心のない住民はどのような観点からこのような劇場活動を受容する可能性があるのかを探ってきた。劇場への肯定的な評価は、何らかの舞台芸術への参加経験が大きな役割を果たしており、鹿野町においては、四半世紀に及ぶ住民主導の「ミュージカル」上演の経験が、現代劇上演の劇場受容に大きく役立ったことがデータからも伺える。また、鹿野町では、まちづくり活動や自治会活動、子どものための地域活動、またミュージカル運営など、地域で行われる様々な住民活動は、積極的に活発な一部の町民が分野を限らずに領域横断的に担っている様子

がうかがえる。町外からやってきた鳥の劇場は、これまで地域活動にかかわることのなかったような子どもや若い世代、子育て世代等にかかわる事業を行うことで、新たな観客を開拓して行くことができる<sup>25</sup>とともに、地域に必要な文化機関としての位置づけがより明確になるものと思われる。一方、参加体験のない住民においても、3年間の活動を経て、鳥の劇場を地域の魅力づくりや子どもの教育という観点で評価する人の割合は増えており、サイレント・パトロン拡大の兆しと見ることができよう。

また、劇場活動の成果を、演劇に関心の無い住民にとっても関心を持ちやすいと思われる「地域の魅力づくり」「子どもへの教育効果」といった切り口で、丁寧に情報発信して行くことが、サイレント・パトロンの拡大につながるものと思われる。

劇場等文化施設の経済的な波及効果や、地域課題の解決へ向けた社会的役割については、今のところ、観劇経験や参加体験の有無にかかわらず、期待感は醸成されているとは言いにくい。2012年6月に施行された「劇場・音楽堂等の活性化に関する法律（通称：劇場法）」の前文には、「劇場・音楽堂等は、人々の共感と参加を得ることにより「新しい広場」として、地域コミュニティの創造と再生を通じて、地域の発展を支える機能も期待されている」と述べられている。「新しい広場」としての具体的な事業を企画運営して行くことはもちろんだが、社会的役割の遂行状況を地域住民にきめこまやかに伝えて行くことも重要だと考える。

本稿の質問紙調査を実施した2011年時点から、鳥の劇場の活動もさらに拡充し、学校現場でのワークショップや親子向けの作品上演数は増えている。また、2013年から小鷺河地区での野外上演が年に1度行われ、新たに、障がいのある人の芸術活動の支援や、鳥取県内各地のNPO法人と連携したアーティスト・イン・レジデンス事業など、さらに幅広い活動が行われている。また地域の側の活動も展開を見せている。鹿野地区以外の2地区にも住民のまちづくり活動を行う組織が生まれている。鹿野地区のまちづくり団体NPO法人いんしゅう鹿野まちづくり協議会は、「鳥の演劇祭」と連携したまちづくりイベントとして、空き家を活用した「週末だけのまちのみせ」を2012年より毎年実施し、新たにぎわいを生み出している。このような、鳥の劇場の活動展開、地域住民の活動の広がり、住民の劇場受容にも変化を与えているものと推察される。また、一方では、鳥取市の予算によるトイレ設備の改修や、旧体育館建物の耐震改修工事計画が検討されるなど、公的資金の投入も増加し、鳥の劇場にはますます公共性が求められるようになっていく。時期を改めて、同じ調査項目を含んだ質問紙調査を実施することで、さらにどのような側面での劇場受容が変化しているのか定点観測を続けながら、サイレント・パトロン形成の広がりや状況を明らかにし、「新しい広場」を創出するような地域社会と劇場との関係を探って行きたい。

謝辞：本稿は、平成23年度鳥取大学地域貢献支援推進事業のいっかんとして、鳥取市鹿野町総合支所との連携により実施した「鹿野町文化とまちづくりアンケート調査」の成果の一部をまとめたものです。調査の実施にあたっては、鳥取市鹿野町総合支所地域振興課、NPO法人鳥の劇場、NPO法人いんしゅう鹿野まちづくり協議会の皆様に、ご協力、ご助言をいただきました。またお忙しい中、アンケートに答えてくださった鹿野町民の皆様に心より感謝申し上げます。質問紙調査の設計および分析方法については、鳥取大学教員養成センター大谷直史准教授より、懇切丁寧なご助言をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

## 注

- 1 市場活動に表面化しない価値とその構造を分析する手段として用いられる。
- 2 「りゅーとぴあ」は、1998年10月に開館した新潟市立の文化施設で、調査は2006年2月に行われている。価値構造の割合は、利用が6%、威信価値29.6%、遺贈価値24.2%と算出されている。
- 3 調査は開館5年目に実施され、訪問度10.3%、認知度31.6%となっている。
- 4 これらの研究では、公立文化施設の支援額の根拠を示すことを目的とし、WTP（支払い意思額）の推計値が文化施設への自治体の支出根拠とされる。兵庫県立芸術文化センターの調査では、利用価値9.7%、威信価値20.9%、遺贈価値20.2%などと算出され、年間約56億円の社会的便益をもたらしていると推計されている。
- 5 鳥取市から無償貸与されているが、賃料に関する鳥取市と鳥の劇場とのやりとりについては、中島2009参照。
- 6 劇場説明資料「鳥の劇場について」には、法人の使命として「わかりやすい」「深い」「一緒に感じ、考える」を軸に、「魅力的な作品を創る」「演劇活動を通じて社会に貢献する」「活動の公共性が広く理解され、認知される」と書かれている。
- 7 鹿野町誌には、昭和9年に妙見座という芝居小屋が民間により建設されたが長く続かなかった（792ページ）という記録がある。
- 8 大正9年に現在位置に移転したもので、現存する旧校舎は昭和44年築である。
- 9 鳥取県内でも現代劇の上演は、鑑賞団体「市民劇場」による招聘公演が、年に5、6回行われるぐらいで、県内でも非常に限られていた。
- 10 合併以前は鹿野町の、合併後も鳥取市の予算が、事業費の一部に割り当てられている。
- 11 当初行政が主導して始めた「ふるさとミュージカル」は、市町村合併後は住民主体の運営により継続されている。「ミュージカル」の年間を通じた活動は、芸術文化を通じたコミュニティ形成に大きな役割を果たしている（地域学部地域文化学科芸術文化コース南野友紀2013年度卒業論文「鹿野ふるさとミュージカルの社会的意義に関する研究」）。
- 12 鳥の劇場の占有使用は2007年からである。それまでは体育館は稽古・上演のときの短期的な使用であった。2011年時点では、体育館は約200席の劇場として、旧幼稚園舎遊戯室が90席ほどの小劇場として活用されていたが、現在、遊戯室での上演は行われず、上演時のロビーや稽古、トーク、ワークショップなど様々な活動に利用されるなど利用状況は変化している。
- 13 「小鳥の学校」では、演劇のほか、宇宙、政治、哲学などの講座があり、最終的にはひとつの舞台作品を発表する。親子向けの上演作品としては、絵本や童話を題材に翻案された作品「どろろぼうがっこう」や「赤いろうそくと人魚」、「森は生きている」などがある。
- 14 常勤スタッフは、年によって変動があるが、10名～16名程度である。
- 15 毎年鳥の劇場活動報告および、筆者が実施した2008年鳥の演劇祭観客調査より。
- 16 1回目の調査は、鳥取県文化政策課の発案により鳥取県と鳥の劇場の協力により筆者が実施し、2回目の調査は、「平成23年度鳥取大学地域貢献推進支援事業」として筆者が主体となって、NPO法人いんしゅう鹿野まちづくり協議会、鳥取市鹿野総合支所地域振興課、鳥の劇場の協力により実施した。
- 17 従って、自治会に加入していない世帯等への配布は行われていないので、実際には15歳以上の人口全員へ配布できたわけではない。
- 18 鹿野総合支所によれば、通常、このような公式ルートでの世帯主への質問紙調査であれば、7～6割の回収率が見込めるとのことだったが、個人調査としたことと調査テーマ等から回収率はそれほど高くなかった。文化活動や観劇は個人の行動であること、高齢化が進んでおり劇場に足

を運んでいるのは世帯主とは限らないこと、また若い世代実態を把握するため個人を対象に質問紙を配布した。

- 19 どの属性も、 $\chi^2$ 乗検定を行い有意水準5%で有意差がある。
- 20 2014年現在では、鹿野町内の10代はほぼすべて、一度は鳥の劇場での観劇体験をしている。
- 21  $\chi^2$ 乗検定により有意水準5%で有意差があるものに、表中「\*」を付した。
- 22 一元配置分析(多重比較)により、有意水準5%で有意。
- 23 「6. どんな人たちが、なぜ鹿野に来たのか、もっと知りたい」は、活動後4年の2011年時点では、選択肢としてそぐわない面もあったが、2008年調査とまったく同じ設問とするため残した。
- 24 2008年に質問紙作成のため、鳥の劇場参加体験の無い町民6名に行った事前インタビューで複数の方から聞かれた要望を反映した。
- 25 2010年からは、子どもを対象とした舞台作品の上演や参加型の事業が行われている。

### 参考文献

- 五島朋子「劇団鳥の劇場観客アンケート調査報告」鳥取大学地域学部附属芸術文化センター、2008年。
- 垣内恵美子「公立劇場の社会的便益の規模を推定する」垣内恵美子・林伸光編著『チケットを売り切る劇場』水曜社、2012年。
- 垣内恵美子「公立劇場による地域活性化の可能性に関する一考察～石川県能登演劇堂の経済波及効果の検討から」『日本都市計画学会都市計画論文集』No.40-3、2005年、907-912ページ。
- 中川幾郎『文献時代の自治体文化政策—ハコモノづくりから総合政策評価に向けて』勁草書房、2001年。
- 中島諒人「地域社会のなかでの自立と世界への発展」『アートイニシアティブ』BankART1928、2009年。
- 村山皓「公的施設としてのびわ湖ホール」の存立、あり方、運営についての評価の研究 — 「びわ湖ホールと滋賀県における文化芸術の振興に関する調査」の分析結果から — 滋賀県受託研究報告書、2009年。
- 奥山忠裕・垣内恵美子・氏家清和「文化施設の社会的便益評価—りゅーとびあ（新潟市民芸術文化会館）を事例として—」『日本都市計画学会論文集』No.42-2、2007年、30-41ページ。
- 鹿野町誌編集委員会『鹿野町誌 下巻』鹿野町、1995年。
- 曾田修司「公立文化施設の公共性をめぐって— 「対話の可能性」に共同体的価値の形成と参加の保証を見る視点から—」『文化経済学』第5巻 第3号、2007年、47-55ページ。
- Throsby, D. *Economics and Culture*, Cambridge University Press, 2001 (=中谷武雄・後藤和子他訳『文化経済学入門』日本経済新聞社、2002年。
- 特定非営利活動法人鳥の劇場「2009年度活動報告書」, 「2010年度活動報告書」, 「2012年度活動報告書」。
- 高島知佐子「文化芸術組織をめぐる経営学的分析のための視点」『経営研究』第56巻第2号、2005年、165-180ページ。
- 吉本光宏「再考、文化政策—拡大する役割と求められるパラダイムシフト—支援・保護される芸術文化からアートを機転としたイノベーションへ」『ニッセイ基礎研究所報』Vo151、2008年、37-116ページ。

(2014年10月3日受付、2014年10月30日受理)